

1 学校教育目標	一人一人の個性を尊重しながら、自ら学び、考え、判断していく創造的な知性と豊かな人間性を持つ心身に健康な子どもを育てる。
----------	---

2 学校経営ビジョン	<p>〇めざす学校像—児童が明日もきたいと思う学校、明るく活気のある楽しい学校、安全と環境が整備された美しい学校</p> <p>〇めざす教師像—児童一人一人を生かし伸ばす教師、「人間力」「教師力」を磨く教師、保護者との信頼を築く教師</p> <p>〇めざす児童像—心をみがく みふねっ子、知恵をはぐくむ みふねっ子、体をきたえる みふねっ子</p>
------------	--

総括的な教育目標を、より具体的な児童生徒や教師、学校の「姿」としてイメージする

3 本年度の重点目標	4 前年度の成果と課題
<p>①心をみがく みふねっ子の育成</p> <p>②知恵をはぐくむ みふねっ子の育成</p> <p>③体をきたえる みふねっ子の育成</p>	<p>前年度、ほとんどの項目で組織的に取り組むことができた。特に九小国研の会場校となったおかげで、国語や読書の力がついたらのように思える。ただ、項目が多すぎるために手が回らない項目があり、職員の頑張りやA評価に直結しないもどかしさがあった。また、評価をしようとしてもその活動を体系的に見えにくいものもあり、重点的に何かをおこなって保護者や地域の方に成果を問うためには、「御船の合言葉」とそれに関わる教育活動を体系化し、教育活動の様子をこまめに情報発信することで、家庭や地域の方々に認識していただく必要がある。そこで、今年度は大幅に項目を絞ることで職員の目標意識を高め、「みふねの合言葉」を意識した組織づくりをすることで、職員が学校教育目標を常に意識しながら教育活動をおこない、それを保護者・地域に伝えていくようにする。また、学校での学習に、家庭や地域での過ごし方が大きく影響するため、「家庭や地域での好ましい生活習慣の定着」に関する項目を、学校と家庭・地域が連携を図りながら定着させていきたい。</p>

このうち、特に今年度力を入れるものを絞り込む。絞り込むに当たって、特に、前年度、「何ができて、何ができなかったか」を参考にする

5 総括表	学校関係者評価委員会から
-------	--------------

①	学校関係者評価委員会から						
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	評価及びその理由	学校関係者評価委員 の評価(A~Dで記入)	意見や提言など
	●心の教育 (前田よ・松村・大島)	道徳教育の計画的実践と児童会活動の連携	<ul style="list-style-type: none"> 児童会活動を通して心を育てる場を年4回設定する。 児童活動の振り返りを年3回学級通信で発信する。 学校が楽しいと言える子が95%以上を目指す。 	<ul style="list-style-type: none"> 代表委員会で人権意識を育てる話し合いを行う。 4回の児童会活動で振り返りの場を設け、思いやりの心や役割意識を継続的に育てる。 	<ul style="list-style-type: none"> 「いじめ0の学校」をめざして代表委員会で話し合い、計画的に実践するように支援したため、自分たちで「楽しく過ごしやすい学校にしよう」という気持ちが高まったが「楽しいと言える」が95%に達しなかった。 活動後の振り返りを児童玄関や学級で掲示したり、通信で知らせたりしたこと他者の思いにふれ個々の成長を認め合うことができた。 	A	子どもたちが自主的にいじめをなくす話し合いをしていることは良い。
	●いじめの問題への対応 (大石・石丸)	いじめ0(ゼロ)運動の推進	<ul style="list-style-type: none"> 「心のアンケート」の友達に関する項目の「遊ぼうと声をかけてくれる友達がいる」「困った時に助けてくれる友達がいる」といえる。 	<ul style="list-style-type: none"> 心なまか部と連携し、いじめ「0」キャンペーンを行う。 心のアンケートを実施し児童理解と問題解決の手がかりとする。 毎週の職員連絡会で、気になる子の情報交換を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 心なまか部や計画委員会と連携し、いじめ「0」フォーラムの開催や人権標語コンクールなどのいじめ「0」キャンペーンを実施した。 心のアンケートやがばいシートによるアンケート調査や心の相談箱を設置し、児童理解と問題解決の手がかりとする。ことができた。 	A	いじめゼロフォーラムは良かった。子どもたちも良く意見を言っていた。

絞り込んだ重点目標の成果や課題を具体的に評価するためには、どのような項目や指標を盛り込むべきかを考える

②	学校関係者評価委員会から						
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	評価及びその理由	学校関係者評価委員 の評価(A~Dで記入)	意見や提言など
	●学力の向上 (松尾・古川)	基礎学力と学習習慣の定着	CRTテストで、全国平均を上回るように授業法の改善を図る。	<ul style="list-style-type: none"> 漢字・計算テストを実施し90点以上の合格をめざす。 「学習のきまり」を徹底する。 	<ul style="list-style-type: none"> 漢字、及び計算検定テストについては、90点以上の合格が達成できた。 学習のきまりについては、掲示しているが、その振り返りや指導が学級によって異なる。 	B	家庭学習は保護者がもっと責任をもってさせないといけない。宿題が多いというのはおかしい。
	●ICT活用教育の推進 (大石・吉田)	ICT機器の有効活用	<ul style="list-style-type: none"> 週1回以上のパソコン室・スマートボード・タブレット端末を活用した授業を行う。 パソコン室・スマートボード・タブレット端末及び活用ソフトの研修会を年5回実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> 校内研修のICT部と連携して「おもやい研」の定期的な開催。 スマートボード、パソコン室、電子教科書の利用状況を月ごとに集計する。 これまで作成されたICT資料を整理し、ライブラリー化する。 	<ul style="list-style-type: none"> 校内研修の「おもやい研」は目標回数まで実施できていないが、ICTスキルアップセミナーへの参加が多く、スマートボード等を使った授業時間は年度当初より伸びている。 	A	来年度はタブレットが入ってくるそうで、先生方は大変だ。4月からの指導に間に合うか。
	○特別支援教育の充実 (橋口・片山)	要支援児童の支援体制の確立	<ul style="list-style-type: none"> 年4回の特別支援の研修をおこなう。 特別支援ミーティングを毎月1回おこなう。 	<ul style="list-style-type: none"> 各学級の児童の実態を把握し、特別支援ミーティングや研修を通して、支援のあり方を探る。 スクールカウンセラーや関係機関との連携を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 定期的な特別支援ミーティングを行い、支援が必要な児童への支援の在り方や他機関との連携について、話し合い、進めることができた。 校内研修を通して、通常学級に在籍する児童への手立てについて、研修を深めることができた。 	A	子どもたちは落ち着いている。集会に参加しても誰がなかよの子か分からない。
	○家庭読書(家読)の推進 (中島・田澤)	「家読の日」の推進と定着 「リレーうちどく」の奨励	<ul style="list-style-type: none"> 家読の日の実施率を80%以上とする。 リレーうちどくの実施冊数を一人あたり年間12冊以上とする。 	<ul style="list-style-type: none"> リレー家読の感想を月1回~2回、おたよりに載せる。 放送、掲示、おたよりで、月二回の家読の日を呼び掛ける。 全校統一したカードを作成し、家読の日に読んだ本の書名を記録させる。 	<ul style="list-style-type: none"> リレーうちどくの感想をお便りに掲載してもらうような呼びかけができなかった。 図書委員会の家読の日の呼びかけが十分にできなかった。 全校統一したカードを作成できた。 	B	読書は是非、家庭でも行って欲しい。親子の触れ合いにしたい。
	○家庭学習習慣の定着 (石丸・大島)	家庭学習の習慣化	<ul style="list-style-type: none"> 各学年の家庭学習目標時間達成を85%とする。(低学年30分、中学年40分、高学年60分以上) 自主学習の取組目標達成を70%とする。(4年1冊、5年2冊、6年3冊) 	<ul style="list-style-type: none"> 「家庭学習のススメ」を配布し、家庭学習の必要性を伝える。 家庭学習の定期的な調査を行い、家庭への啓発と定着を図る。 宿題以外の自主学習に取り組む課題の出し方を検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> 各学年に合わせた「家庭学習のススメ」を作成し、家庭学習(自主勉強)の手引きとした。 児童の自主勉強ノートにも工夫がみられるようになり、掲示して紹介することで、全校的に前向きに自主勉強に取り組むようになった。 	A	家庭学習のススメを配布されたのは良い。学年ごとに目安の学習時間が示されているのは良い。

③	学校関係者評価委員会から						
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	評価及びその理由	学校関係者評価委員 の評価(A~Dで記入)	意見や提言など
	●健康・体づくり (千綿・大嶋・桑原)	体力の向上及び望ましい食生活習慣づくり	<ul style="list-style-type: none"> 新体力テスト等で児童の実態を把握し、授業や業間運動等で適切な指導を行いながら前年度よりも体力の向上を図る。 体育的行事の計画的指導を行う。 「おさがんぼう」週間を設け着せ替えを配布する。 校医の先生と連絡を密にし、毎月第3木曜日の健康相談日に適切な指導助言をいただく。 	<ul style="list-style-type: none"> 新体力テストの結果を児童に配ることで自身の体力を知らせ年間のめあてをもたせて運動生活を送らせる。 休み時間は外で元気に遊ぶ事を奨励する。 体育的行事の計画的指導を行う。 「おさがんぼう」週間を設け着せ替えを配布する。 校医の先生と連絡を密にし、毎月第3木曜日の健康相談日に適切な指導助言をいただく。 	<ul style="list-style-type: none"> 4月と12月のスポーツテストの結果から50m走の向上率は、64%であった。実施時期や授業での取り上げ方などに課題があった。 スポーツテストの結果から体力向上の計画を立て、みふねオリンピックやパワーアップ運動の計画を立てた。各行事との関係でなかなか実施できない部分があった。 	B	先生方の取り組みは評価できるが、さらに体力の向上を目指して欲しい。
	○食育推進 (橋口・浦郷・山口直)	望ましい食習慣の形成	<ul style="list-style-type: none"> 5校時給食を推進し、残菜を一人1日1g未満とする。 お弁当の日を年間5回設定する。 年間計画をもとに栄養職員を使った授業を年10回おこなう。 	<ul style="list-style-type: none"> 放送による食育指導と児童によるポスター作成の実施。 お弁当の日を設定し、児童が準備や片づけに関わるよう啓発を行う。 各学年に応じた栄養職員の活用を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> <成果> 88%の児童が基本的な生活習慣、学習習慣の定着が見られた。担任を含め多数の教員で声かけを行ったり、こまめに家庭への連絡を行ったり、個別指導・補充指導を適宜行ってきた成果と言える。また、学年の話し合いを密に行いながら共通意識をもって指導を行ってきたことが指導の効果を高めている。 <課題> 低学年の指導(躰)が、中学年、高学年の成長の基礎となっていく。整理整頓、話の効き方を含め今後とも指導を継続していきたい。 	B	人数が多い割に、市内の学校であるのに朝食をとる子どもの割合が高い。

本年度の重点目標に含まれない共通評価項目						学校関係者評価委員会から	
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	評価及びその理由	学校関係者評価委員 の評価(A~Dで記入)	意見や提言など
	●小学校低学年の学習環境の改善充実 (古川・黒木・前田い)	低学年における学習習慣・生活習慣の定着	<ul style="list-style-type: none"> 幼保小の連携、家庭との連携を図り、学習習慣、生活習慣の目標達成率を90%以上定着させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 幼保小の連携、家庭との連携を図り、学習習慣、生活習慣の目標達成率を90%以上定着させる。 	<ul style="list-style-type: none"> <成果> 88%の児童が基本的な生活習慣、学習習慣の定着が見られた。担任を含め多数の教員で声かけを行ったり、こまめに家庭への連絡を行ったり、個別指導・補充指導を適宜行ってきた成果と言える。また、学年の話し合いを密に行いながら共通意識をもって指導を行ってきたことが指導の効果を高めている。 <課題> 低学年の指導(躰)が、中学年、高学年の成長の基礎となっていく。整理整頓、話の効き方を含め今後とも指導を継続していきたい。 	B	挨拶の定着が悪いと学校は言うが、地域では朝も帰るも挨拶は以前より良くしてくれるようになった。

6 総合評価	<p>いじめ0フォーラム実施に向けて学校、家庭、地域が連携して取り組み、実現できたことは大きな成果である。いじめをなくすことについて3者が真剣に話し合う事ができた。また特別支援教育においても特別支援ミーティングを定期的に行ったり気にかける子の情報交換会を定期的に行ったりして児童把握に全職員で務め、児童の安心・安全して生活できるいじめのない学校づくりに努めた。</p> <p>学習状況調査では学年によって達成率が異なる。全学年で成果を出せるように指導法の工夫が必要である。スポーツテストの結果も県平均を下回る項目が多く、次年度は体力向上の対策をとる必要がある。</p>
--------	--

7 来年度の改善策	<ul style="list-style-type: none"> 次年度はタブレットが全児童に配布される。反転学習をはじめ、更にICT活用教育を勧めていく必要がある。またICT機器の活用を通じた言語活動を充実した学び合いを展開し学力向上につなげていく。 体力向上を図るために体育科の指導法を工夫し、運動量確保と共に生涯体育につながるよう運動の特性に十分触れさせる学習展開を心がけていく。また体育的行事の工夫と、運動環境をの充実を併せて取り組んでいく。 心の教育は教育相談、特別支援教育、生徒指導、特別活動等の連携を強め、組織的に取り組んでいく。また家庭、地域との連携も深め、今まで以上に子どもたちが安心して通え、楽しい学校にしていく必要がある。
-----------	---

●は共通評価項目、○は独自評価項目